校長室だより～燦燦～ №１０４

上手な転び方

2020.4.30

ある本を読んでいたら、このようなことが書かれてあった。

その人が、学生時代、スキーを習っていたときのことである。若手のスキーコーチの指導を受けながら、急な斜面を滑る練習をしていた。うまく滑れずに転んでばかりいたその人に、その若手コーチは、実に根気よく懇切丁寧にアドバイスをくれた。

しかし、何度トライしても、なかなかうまく滑れなかった。そのため、自分にはスキーのセンスが無いのかと自信を失いそうになり、さすがの若手コーチも、少し諦め気味になってきたときに、それを近くで見ていた年配のコーチがやってきてその人に言った。

「大丈夫だ。君は転び方がうまい。きっと上達するよ」この言葉に励まされて練習を続け、その人は急な斜面もうまく滑れるようになった。

なぜ、その人はうまく滑れるようになったのだろうか。きっと、自分が励まされたのは、転び方がうまいと褒められたからではない。褒めるところの無い状態において、転び方を褒めてまで、上達を信じてくれる人がいた。そのことに励まされたのではなかろうか。その人の可能性を信じること、それはもしかしたら我々が人に対して捧げうる最高の贈り物なのかもしれない。

教員をやっていると、似たような状況を経験することがある。教科の学習でも部活動でも、はたまた我が子に対しても。私の場合は、部活動での経験から、“その人の可能性を信じること”を教わった。教え子が私に教えてくれたわけである。

いつも一生懸命練習し、上達してきた選手がいる。努力を認め試合に出すがなかなか勝てない。何回出しても勝たない。それでも私は試合に出す。その選手の頑張りを認めているし、可能性を信じていたのだと思う。そして、最後の大事な大会を迎えた。団体戦でこちらの大将格のエースが負けてしまった。もう後がない。こちらは、試合には出るが、いつも負けている選手である。相手は向こうのエースである。万事休すと誰もが思ったことだろう。

だが、勝ったことがない選手は全くあきらめてはいない。私は正直「負けてもいいから最高の試合をしてくれ」と願っていた。試合が進んでいく。どうもこちらのペースである。向こうが押されている。「これはもしかして」と思わせる雰囲気になってきた。とうとう勝ってしまった。

私には、このような経験が何度かある。いつもは負けている選手の大金星により、チームは波に乗り勝ち上がっていくのである。一番大事な大会でのかけがえのない貴重な勝利のことをその選手は一生忘れることはないだろう。なぜ、あの試合だけ勝つことができたのか。その答えはわからないが、何度か同じようなことがあったということは、何かしらの法則のようなものがあるのだろう。

私は、その選手が勝つだろう、勝ってくれるだろうと思って試合に出していたわけではない。ただ、「いい試合をしてくれ」と思い、今までの努力を評価して出していたのだと思う。すると、なぜか奇跡は起こる。やはり、心のどこかでは可能性を信じて「勝ってくれるかもしれない」と思っていたのかもしれない。人には、特に若者には無限の可能性がある。